



タンチョウ博士のお話 (第39回)

3歳になったオスは故郷へ戻り、メスは・・・!

舞鶴遊水地に住むタンチョウ夫婦は、今年も子育て中です。2020年から2024年まで、毎年産卵・育雛いくすうを行い、2022年と昨年は冬まででしたが、それ以外は1羽を自立するまで育てるのに成功しています。ご承知のように、タンチョウのなかでも優秀な繁殖つが番いです。

このうち、2020年と2021年生まれの子は、すでに5歳と4歳の成鳥になっていて、名札(標識)がついていないのではっきりとは言えませんが、少なくとも1羽はオスで、近隣の遊水地などで繁殖活動をしているようです。

実は、タンチョウの子が親から独立して、気に入った相手と繁殖のためどこに住むかは、オスとメスで異なります。まず、1歳になって独立した亜成鳥たちは、オスもメスもあちこち2年間、広く飛びまわりながら、気に入った相手を見つけます。一般に3歳になると、オスは番い相手のメスを連れて生まれ故郷へ戻り、なわばりを構えて繁殖生活を始めようとしてます。こうした傾向を、専門用語では出生地回帰性しゅっしょうちかいなどと言います。もし、親が亡くなっていて、実家が空き家なら、そこに住むでしょうし、もし親が健在なら、あちこち飛び回っていた間に見ておいた、近くの適切な所に新居を構えるでしょう。舞鶴遊水地で育った若鳥も、親はまだ舞鶴遊水地で頑張っていますから、慣例に従い生まれた場所近くに繁殖地を決めたと言えそうです(図)。

しかし、近場ちかばに適度な空き地があるとは限りません。しかたありません。オスはどこか離れた条件の良い所へ行くしかないですね。これを相手のメスの立場からみると、番い生活をいとなむ所はオス次第

となります。根室地区での調査でも、生まれた場所と繁殖なわばりとした位置の間は、オス6羽の平均が約6kmなのに、メス6羽では約52kmもありました。しかし、ヒトもこれと似たようなもので、長沼町生まれで、長沼町に住む男性と結婚した女性も、たとえば彼女の生まれが本州なら、生まれた所から離れたところに住むこととなります。

ただ、タンチョウでも、繁殖地で子育て中にオスが死亡したメスの生活領域(なわばり)へ、新たなオスが来て番いとなるケースも知られています。この場合は住む場所を結果的にメスが決めたことになり、いわばヒトの婿入りのような状態です。

繁殖地を決める際は、オスの出生地回帰性が原則だとしても、タンチョウも状況に応じて最も適した方法を選び、暮らしていると言えるでしょう。

(文：正富宏之)



図. 2021年に舞鶴遊水地で生まれたオスと思われる子が成長し(右上の個体)、長沼町の近くで繁殖を始めた映像(撮影：一般社団法人タンチョウ研究所)

▶ 問合せ 役場企画政策係 (☎76-8015)